
IS 転生して貰ったのは！？

マーシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 転生して貰ったのは！？

【Nコード】

N8610Y

【作者名】

マーシー

【あらすじ】

二次創作が大好きな青年がISの世界に転生！？おまけで貰ったのは青年が大好きだった二次創作に出てくるオリIS。これで原作介入だ！……そんな風に考えていた時代がありました。IS
チートは隠すもの の派生作品として書いて見ました。

その1（前書き）

元々は息抜きで書いていたのを連載して見ただけなので一話一話は短いです。

その1

初めまして。俺の名前は一二三ひふみ 四五六しうろだ。

俺の事を簡単に説明すると転生者と言う奴だ。俺は死ぬ前は二次創作が大好きで暇さえあれば色んな二次創作を読み漁っていた。

その中でIS<インフィニット・ストラトス>と言うラノベを題材にした小説が大好きだった。俺はいつもISを題材にした小説を読みながら、俺だったらこうする、此処はこういう行動で、俺の専用機は、などと妄想ばかりしていた。

中でもIS チートは隠すもの に出てきた「八卦龍」と言うオリISが大好きだった。

元はゼオライマーと言うアニメが某ロボットシミュレーションに出てきた時、そのゲームのためだけに書き降ろされ、出てきた機体をこの作品の作者が弄って作り出した機体であり、そんな機体に俺は心を引かれた。

いつも俺は妄想の中でこの機体を使ってISの世界で活躍するところを考えていた。そんな事を常日ごろから考えていて、つい考え事、いや妄想に浸っていたら俺は死んだ。交通事故で。

何のことは無い妄想に集中していたせいで信号が点滅していたにも関わらず歩道に出てしまい近くの工事現場に向かっていたロードローラーに轢かれてしまった。

なんていう間抜け。自分でもコレは無いと思った。

だが、俺は死んで意識を失ったはずなのに気が付くと赤ん坊になっていた。その時、俺が思った事は混乱したり訳が分からなくなっただけではなく、ただ

（テンプレキター）

と思っていた俺はダメ人間だったと思う。

さて、そんな風にテンプレなのかそれともそれ以外なのかは知らないが俺は赤ん坊からやり直し体を自由に動かせる用になった頃、俺の玩具箱（両親が与えてくれた）の中に”八つの球体”が着いたアクセサリーが入っているのに気が付いた。

俺がコレを手についた時、頭の中にある知識が流れ込んできた。

それは紛れも無くISの知識であり、そして俺が大好きだった「八卦龍」の知識だった。

俺はこの「八卦龍」を手に入れたという事実には驚愕し、次に感動しているかどうか分からない神様に感謝した。俺が大好きだった「八卦龍」をくれてありがとうございます、と。

そして、この「八卦龍」を手に入れたことによって、この世界がISの世界であることに気が付き、前世から思っていた原作介入をすると決めて、原作ヒロインを彼女にするぞ、と意気込んだ。

……
……そんな時代がありました。

俺は「八卦龍」を手に入れた事とテンプレ的な転生をした事によってある事を忘れていた。

「八卦龍」は元となった小説内で世界経済を牛耳っていると言っても過言ではない「世界電脳」が総力を挙げて作り出した機体であり、その技術力は小説内では世界一位であり篠ノ之束博士をも上回る技術力が使われた機体で有る、という事を。

つまり何が言いたいかと言うと、この「八卦龍」

整備、補給、その他もろもろが出来ない、と言う事だ。

しかも、この「八卦龍」を手に入れた時、世界ではまだISは発表されていないので俺がISを持っている事自体がおかしい事であり、しかも「八卦龍」に使われている技術はどれをとっても原作内の技術力を上回っているので、下手にこれが世界にばれたりしたら、冗談抜きで世界中から、狙われる事になる。

テンプレで転生してオリISも手に入れて原作介入だ！！と思ったら、ばれたら命を狙われかねない状況だった。

どうしよう（笑）

その2

皆さんこんにちは。オリ主の四五六です。

Q さて、今俺がいる場所は何所でしょう？

A IS学園内1年1組

そう、原作主人公、織斑一夏がいる1年1組の教室内です。なぜ、俺が此処にいるかと言うと、ええ。そうです。俺がISに乗れるという事がばれました。

理由としては簡単な事で、一夏がISに乗れる、という事が発覚してから世界中の国で男性を対象とした適性検査が行なわれたからです。で、それに見事引っかけたのが俺、と言う事だ。

事前に対応しておけばよかったんじゃないか？と思う人も居るかもしれない。

だが、考えて見てくれ。

俺が手にした物は「八卦龍」"だけ"である。

IS関係の知識や技術なんていうものはないのである。つまりはISに乗れる事を隠す方法を知らないという事で……

あ、でも「八卦龍」自体は乗りこなせるだけの技量は有ったみたいで、今ではキノ以上に扱える自信があるぜ！！でもGZ様に乗ったキノには勝てる気がしないがな！！

さてそんな風に考え事をしていたら原作であつた織斑姉弟のやり取りが終わり、俺の自己紹介になつた。

「はじめまして。漢数字で一二三四五六と書いてひふみしごろ、と言います。好きな事は一人でいること、音楽を聴くこと、嫌いな事は、不特定大多数の人が居る場所にいること、勝手に物事を進める人です。ISになぜか適正があり、この学園につれて来られました。ISの”知識”に関しては何も知らない素人なのでいろいろ足を引っ張ると思いますが、よろしく願ひします」

そつち言つて頭を下げ席に戻る。クラスの反応はまあ、ぼちぼちと言つたところだ。

ちなみに俺の見た目だが、銀髪に赤と青のオッドアイで顔つきもかなり整っている。下手なモデルよりかはかなりカッコいいと言つてもいいぐらいだが、正直いらなひです。

こんな中二病な姿で名前は漢数字オンリーって似合わないにも程があるだろう。

なので、学校に来る前から髪は黒に染め黒のカラーコンタクトをつけ、地味な黒ぶちメガネをかけて地味な格好をしています。

おかげでクラスの女子の殆どは一夏に興味がいっている様で何よりだ。

俺は確かに前世とこの世界に生まれた直後はハーレムだの原作ヒロインを恋人にだの思っていたが、それはあくまでもそういう風に考えている事自体が楽しかったのであり実際に目の前にヒロイン達

がいたら、恐縮して何も出来はしないのだ。

チキンだのヘタレだの大いに結構！！

俺は物語を脇から見ている傍観者になりたいのだ！！

まあ、「八卦龍」の事がばれて命を狙われたくないって事も有るがな！！

その3（前書き）

この作品のヒロイン登場！？

その3

自己紹介が終わり、授業が終わり、休み時間となった。

一夏は早速、俺の所に来ようとした所を篠ノ之箒と呼ばれ、廊下に出て行ってしまった。つまり教室には俺一人になると言うわけで。

正直、キツイです。いろんな意味で。

今の俺は地味な格好をしているせいで余計にキツイです。何がって、周りの囁きが。

「あの人？二人目の男性適合者って」

「……なんか地味だね」

「織斑くんはかつこよかったのにね」

そんな感じの囁きが周りから聞こえてくる。

耐えろ、耐えるんだ俺。此处でこの囁きに負けて変装を解いてしまったら、大変な事になる。地味でいいんだ。地味で。このまま俺は地味に過ごしていくんだ。厄介事は一夏がきつと何とかしてくれるはずだ。

そんな風になで葛藤していたら、やってきました。厄介事が。

「ちょっと、よろしくて？」

チヨロコット、もといオルコット嬢が。

「なんですか、えつと……チヨロコット?さん」

「だ、だれですかチヨロコットって。セシリア・オルコットですわ
オル・コ・ツ・ト」

「そうでした。すみません。オルコットさん……で、何か用ですか
?」

「全く、コレだから男と言う物は……ハッ、コホン。用と言うのは
……」

キンコーンカーンコーン

「「あ」「

用件を言おうとした時に授業開始の鐘になる。

「こ、今回はコレまでにして差し上げます」

そういつてそそくさと席に戻るオルコットさん。

(なんとという小物臭w)

そして授業が始まる。その後はまあ原作と同じ様な展開で終った。
オルコットさんは先ほどの事で話すタイミングを見失ったようで今
日は話しかけてこなさそうだ。

そして放課後。

「織斑君に一二三君いますか」

山田先生が俺達を探していた。

「何か用ですか、山田先生？」

「あ、一二三君。織斑君は見ませんでしたか？」

「いえ、見てません」

「そうですか。では先に一二三君に渡して置きますね」

山田先生から渡されてのはカギだった。

「……ああ。寮のカギですか」

「はい。そうですよ。一二三君のルームメイトは1年4組の子になりますから仲良くしてくださいね」

「はい」

山田先生と別れ、寮の部屋へと向かう。

「此処か」

とりあえずソックをしてみる。

「誰か、居ますか？」

「………はい」

「今日からこの部屋のルームメイトになった者ですが」

「……………どうぞ」

はて？何所かで聞いたような声だが、誰だったかな？

「では、失礼します」

そして入った部屋に居たのは

「……………誰、貴方」

メガネを掛けた青髪の少女だった。

その4

今俺の目の前に居るこの女性。

名前を更識簪と言う。

原作では彼女は自分ひとりの手で「打鉄式」というISを作るうとしていた人物である。彼女も原作では一夏ハーレムの一員となるようだが、まさかこんな所で原作ヒロインに会うことになるとは。しかもルームメイトって……

「あゝ山田先生に聞いてないかな？ 今日からこの部屋のルームメイトになる一二三四五六だが」

「……そういえば、そうだったかな」

「では、改めて自己紹介をしよう。俺は漢数字で一二三四五六と書いてひふみしごろって言うんだが君の名前は？」

「……更識簪」

「更識簪ね……では更識さ「苗字で呼ばないで」……では簪さん」

「なに？」

「とりあえず、これから一緒に部屋の部屋で生活する事になるのだが、いろいろ決めておこうと思うのだが。シャワーの順番とか」

「……分かった」

それからしばらくの間二人で順番とか、細かい注意点を聞いたりしたりしてその日は終わった。

え、隣に女性が居るのに寝れたのだった？

ハハハ。紳士である俺に彼女に何かするなんて事出来るわけないだろう。

……すみません。嘘つきました。本当は彼女の姉が恐くて何も出来ませんでした。

彼女の姉である更識楯無は原作キャラ内では上位の腕前を持つIS乗りである。さらに対暗部用暗部、「更識家」の当主でありその人脈や情報網はかなりのものらしい。ついでにシスコン。

そんな姉を持つ彼女に対して何かして見る。物理的、社会的に消されてしまうわ！シスコンモードでブチぎれた楯無さんを相手にしたら「八卦龍」でもきついわ。ギャグ的な意味で。

さて、次の日になり朝、まだ布団の中に居る簪さんに軽い挨拶をしてから食堂で朝食を取る。

今日のメニューは白米に鮭の塩焼き、味噌汁、おひたし、卵焼き、納豆、飲み物に牛乳をチョイスした。ちなみに食堂が空いた直後ぐらいに入っただけで周りには殆ど、と言うか俺以外に誰も居ない。

食後、一度部屋に戻り教科書類を持って教室に向かう。

簪さんはまだ寝ぼけてたのかボーっとしてた。

教室で、一人教科書を開き予習をしている俺。実際はこっそりと「八卦龍」を使いこの学園内にあるパソコン類にハッキングをかましているいろと情報を収集している。まあ、殆どを「八卦龍」に搭載されているAI、MIKUにしてもらっているけど。

そんなこんなでいろいろ足跡がつかない程度に情報を収集していたら、誰か教室に入ってきた。

「いつちばーんってあれ、一二三君、もう来てたの」

「ええ」

「来るの早いんだね」

「朝は強い方なので」

そんな風に簡単に会話をしていたら続々とクラスメイト達が来てまあ似たような反応をしていき、最後になにやら慌てた様子で、一夏と冨が入ってきて授業が始まる。

授業中も「八卦龍」による情報収集は怠らない。何時トラブルに巻き込まれ、「八卦龍」の事がばれるか分からないのだ。

それに、極々最近なのだが「八卦龍」に関してとても重大な事が判明した。正直知らなかった方がよかったことである。

この「八卦龍」正確にはISではないのだ。ISの機能を持った別の機体なのだ。

つまり、この「八卦龍」の情報の中にISと同等の性質、機能を持ち量産が可能で性別による適正が無いコアの情報も含まれているのである。

……真面目にこの「八卦龍」の情報が外に漏れでもしたら第三次世界大戦が勃発しかねん。

チートISと思っていたのが実は特大の地雷だった。

その5（前書き）

作者はオルコットは嫌いじゃないよ。

ただ書いてる内にこうなっちゃうんだ。

その5

今俺の目の前では原作最初の見せ場？の切欠となるイベント、そうオルコットさんの女尊男卑発言をリアルタイムで聞いてます。

「くとしても後進的な国にすること事態、わたくしにとっては耐え難い苦痛で〜」

「イギリスだってたいしてお国自慢ないだろ！！世界一まずい料理で何年覇者だよ！！」

「な、何ですって！！」

原作と同じくクラス代表を決める話が出た時、推薦が一夏にしか出なかったことに腹を立てたオルコットさんが原作通りの発言をして一夏が切れた、と。

ちなみに俺の名前は殆ど出ていません。

フッフ、このために地味な格好と地味なオーラを出して目立たないように人に目線に入らないように過ごしてきた甲斐があったものだ。今では俺の事など「そういえば居たよね」程度しか認識されていないのだ。

フハハ！！これで原作キャラとの邂逅は無くな「ではクラス代表を決める模擬戦はオルコット、織斑、一二三の三人で試合をしてそれで決めることにする」った……え？

「フン！無様に負けるがいいですわ！！」

「それはこっちのセリフだ!!」

「いやいやいや」

ちよつとまてや!!

「織斑先生、どういう事ですか。俺も模擬戦に出るって!!」

「何を言っている、貴様も推薦されただろう?」

「だからって、いくらなんでも無理があるでしょう」

一夏みたいに専用機を与えられるわけでもないのに代表候補生と戦えっていくらなんでも無茶すぎるだろう。「八卦龍」は使えねーんだぞ!!

「これは決定事項だ、腹を括れ」

そういつて出て行ってしまった織斑先生。ねーよ、マジねーよ。

せつかく地味に過ごしてきたのにこれはねーよ。

「四五六、そんなに落ち込むなよ。アレだけ言われたんだ、このまま黙ってられないだろ」

「織斑さんはまだ度胸がある方ですのに一二三さんは情けない事ですな」

となにやら二人が言っているが、こいつら今の自分達の立場と状

況が分かってねーのか!?

「二人とも、今回の模擬戦がどういう状況になってるのか理解してるのか?」

「どうゆう状況ってなんだよ?ただクラス代表を決める試合だろ」

「何を仰ってるのかしら。まあ結果の見えた試合で……」

「……今回の模擬戦、下手するとイギリスと日本の関係が悪化するんだぞ」

「」「」「え?」「」「」

俺の発言に二人だけではなく、話を聞いていたクラスメイト達も声を出して不思議がる。

「ど、どういう事ですか、関係が悪化するって!!」

オルコットが息を荒げて言ってくる。

「オルコット、この模擬戦が決まる前に一夏に対してなんて言ったか覚えてるよな?」

「それがどうしたって……」

「極東の島国、野蛮な猿の国、後進的な国等々そんな発言したよな?」

「ええ、言いましたわ」

「……その発言が一夏と二人だけの時に言ったならともかく、いやそれも問題だが、そんな発言をよりにもよって授業中、しかもコレだけの人数が居るところで発言したって事は、その発言はオルコット個人の発言ではなく、イギリス代表候補生としての発言として取られても反論できないんだぞ」

「四五六、それがどうしたっていうんだよ」

「……代表候補生の発言、それはその国の発言として取られてもおかしくはないって事だ。つまりイギリスは日本の事を野蛮な猿の国で後進的な国である、と宣言した、と取られてもおかしくはないんだよ」

其処まで言ってオルコットは自分がどういう発言をしたのか理解して青ざめてた。

「今の世界情勢で日本と言う国がどういう意味を持つか分かるだろう一夏」

「それは……」

「ISを開発した人物は日本人、最強のIS乗りも日本人、ついでにIS学園の生徒も半数は日本人。こんな状態であんな発言をしたら、どうなるか一夏お前でも分かるだろう」

「……」

何もいえなくなる一夏。だが、まだ終わらない。

「コレだけでもヤバイのにまだあるんだぞ」

「まだありますの!?!」

かなり顔色が悪くなっているオルコットが叫ぶ。

「オルコット、お前が発言した言葉をぶつけた相手の名前を言ってみろ」

「相手の名前? 織斑いち……」

「分かったな? 織斑一夏。つまり世界最強のIS乗りである織斑千冬の実の弟である相手に野蛮だの猿だの言っただ。しかも一夏は世界初の男性IS適合者。そんな相手にアレだけの発言をしたんだ。どう見繕ってもイギリスと日本の関係が悪くなるのは必須。」

もう顔色が悪くなりすぎた青から白くなってきたオルコット。

「ついでに織斑千冬と織斑一夏の二人はISの生みの親篠ノ之束博士に気に入られているらしいじゃないか。もし今回の事が束博士に聞かれて機嫌を損ねるようなことになったら、下手するとイギリスが保有しているISコアだけ機能停止させられるかもしれないんだ。今のご時勢、国がISを使用できない事がどういう事になるかなんてISに関与した人間なら分かるだろう?」

其処まで言ったらオルコットはぶっ倒れた。

「ちょ、オルコットさんシッカリして!!」

「だれか! 衛生兵! 衛生兵!!」

教室内は阿鼻叫喚の状態になってしまった。やりすぎたか？

その6

オルコットさんと一夏に今回の試合がどういう事態を招くか言っ
て見た次の日から、オルコットさんに親の仇かの要な目で睨まれて
ます。

何故俺を睨む。

それはさておき、今は今回行なわれる試合で俺がどういう風にす
るかを考えなければ。

原作では一夏が一次移行するまでの間ひたすらに避けて一次移行
した後後一步まで追い詰めるもエネルギー切れで負ける、と言う展
開なのだが其処にもう一人の人間が入るとなると話は変わってく
る。

俺に専用機を〜と言う話は上がってきていないのでつまり量産機
で相手をすることになるのだが、まあ八卦龍でひたすら鍛え上げた
俺なら量産機でも専用機持ちに勝てる自信はある。あるのだが、そ
んな事はまず出来ない。

なぜなら、そんな事したら確実に面倒な事に巻き込まれる。

IS 起動回数や機動時間が優に三桁を越えているような代表候補
生に対して公式ではIS 起動回数も起動時間も二桁に届かない素人
である俺が初の試合で余裕を持って専用機持ちの代表候補生に勝ち
ました〜なんてできねえよ。

そんなことしたらマジでやばいよ。政府に目を付けられるし、此

処の生徒会長にも絶対目を付けられるよ。ただでさえ妹さんと一緒に部屋の時点ですでにヤバイのに……。となると負けるか引き分けにするかなんだが、引き分けもまずい気がする。だから此処はワザと負けるしかないか。しかもすぐ負けるのではなくそれに戦ってから負けないと今後の生活に支障がおきかねんからな。

めんどくさ!!

そんな風に考えてたら昼になった。ので一夏に声を掛けられる前に教室から離脱、そしてMIKUの情報から人が少ない場所ですさと弁当を食べる。

この弁当は俺お手製の弁当である。二度目の人生はいろいろとして見たかったので料理をし始めたらつつい夢中になってしまい、なかなかの腕前になった。

ちなみに同じ部屋の簪さんのと一緒に作ってある。

なぜかって？簪さん、食生活がかなり不摂生なんだよ。なんだよ、食堂で食事するのは数日に1、2回それ以外はカロリーメイトとビタミン剤って。女子の食事じゃないだろう。

それを見かねた俺が注意したら、「……其処まで言うなら貴方が作ってよ」等と言うから、ええ。作ってやりましたとも。栄養バランスはもちろん見た目の配色、ご飯とおかずのバランスなど考えつくしたお弁当を毎日作って渡してやりましたとも。で、簪さんも俺のお弁当は気に入ったのか今はお昼のお弁当はシツカリと食べるようになっていました。

あれ、コレって餌付けしてる？

裏 その1

先日から私のルームメイトになった世界で二人目の男性IS適合者である一二三四五六。

かなり珍しい苗字と名前の彼だったけど、はじめて見た感想は地味。その一言に尽きた。

始めてあつた頃は殆ど興味なんて無かった。私は“この子”を完成させる事だけを考えていたから。

それからしばらくの間私たちは殆ど会話らしい会話をせず、同じ部屋に居るだけの他人、そんな関係だった。でもある日、彼が私の食生活について質問？をしてきた。

「簪さんはいつもそんな食事してるの？」って。

その頃の私の生活は授業以外は殆ど部屋に籠り、パソコンのモニターに写る“この子”の事だけを考えていた。だから食事は殆ど携帯食糧とビタミン剤で済ませてた。食堂では数日に1、2回しか利用してなかった。

そんな風に言ったらすごく怒られた。やれ、「女の子がそんな食事では」とか「成長期に」とかクドクドと言われた。

そんな彼に私はうつとおしく感じ、「……其処まで言うなら貴方が作ってよ」と言ってやった。こう言えば料理も出来ないくせに私の食生活に口出しできないだろうと思っていただけのだけど、次の日、私の目の前にはかわいらしい模様の布で包まれたお弁当が置いてあ

った。

そのお弁当を前に彼はどや顔で立っていた。地味だけど。

流石に実物を出されてはしょうがないと取り合えずその日はそのお弁当を持って授業に向かった。

そしてお昼の時間。私は人通りの少ない場所で彼のお弁当の中を見て驚いた。

失礼だけど彼の見た目からは想像できないほど美味しそうな弁当だった。見た目の配色に栄養バランスの考えられたおかず。全体の量も私にぴったりの量だった。

味の方もかなり美味しくて気が付いたら綺麗に食べ終わっていた。

その日の夜、彼は何所と無くわくわくした表情で私にお弁当の感想を聞いてきた。

何か癪だったから「……まあまあ、だったよ」と言ったら、「なら美味しいって言うまで作り続けてやる」と言われ、その言葉通りに次の日から私のお弁当を彼が作ってくれるようになった。

癪だけど、彼が作るお弁当は毎回毎回美味しい物ばかりで、気が付いたら私はお昼のお弁当の中身を楽しみにしていた。

アレ？私餌付けされてる？

その7（前書き）

この作品内ではいろいろご都合主義が発生しております。

どうか温かい目でご覧ください。

その7

さて、今日遂にクラス代表決定の試合が行なわれる事になる。

アリーナ内は何所からか聞きつけてきた生徒で埋め尽くされていた。

「……で、一夏。お前の専用機は？」

「……まだ、来てない」

原作通り一夏の専用機はまだ来ていないようだ。つまり

「仕方が無い。一二三、先に試合をしてもらっ」

こうなる。

「……ハア。分かりました」

「四五六、がんばれ!!」

一夏が応援してくれるが、こうなったのはお前が原因の一つって分かってるのか？

ちなみに俺が使用する機体は「ラファール・リヴァイヴ」。量産機の中で最も多くの武器を使用できる事からこの機体を選んだ。

フッフ、見ているがいいセシリア・オルコット。俺が対ビット兵器用戦術を見せてやる。

「よく逃げ出さずに来ましたわね」

「……ハア。逃げるも何も出来るわけないだろう。そんな事」

「フン！これだから男と言う生き物は」

「いや時間押してるからさっさと始めない？」

「っ！……いいですわ。なら始めましょう」

開始のブザーが鳴り響く。

「そして貴方の敗北で終わりです！！」

その言葉と同時に放たれるビーム。その行動に俺は

「ほい」

放たれたビームの斜線上にスモークグレネードを投げ込んだ。

「な！！煙幕！？」

結果。アリーナ内に灰色の煙が充満する。とは言えスモークグレネード一つでアリーナ内が煙で埋め尽くされるわけも無いので俺はさらに追加で3、4個四方に投げる。

「煙幕で目を暗ましたところで私には勝てませんわ！！」

「でも攻撃も出来ないでしょ」

「っ」

数メートル先も見えないほどの濃度となった煙の中では流石に不利と悟ったのか煙の外に離脱するオルコット。

「ハッハッハ、すぐに終らせるんじゃないかったのか」

「馬鹿にして!!」

だが、煙幕の外に離脱したとは言え相手は未だに煙の中。いくら射撃が得意と言っても煙の中見えない相手に闇雲に攻撃するわけにも行かず歯がゆい思いをする。

「卑怯者!!男なら正々堂々戦わないのですか!!」

「え」。女尊男卑思考の貴方がそんなこと言ってもねえ」

「くっ」

「それに“IS”起動回数も機動時間も三桁越すような人に起動回数、起動時間共に二桁に届かない素人に真正面から戦えとか、鬼畜過ぎるだろ」

そう。原作でも思ったがさっき言ったとおり素人が代表候補生相手に真正面から戦いを挑むとか無理がありすぎる。まあ、そんな事を言い出したらいろいろ台無しだが。

ちなみに起動回数、機動時間共に二桁に届かないって言うのは

本当だよ。

「八卦龍」は？

いや、アレは厳密にはISじゃないからいいんだよ。だから“IS”の起動回数、機動時間に対して嘘は言ってない。嘘はね。

（全く、男と言う生き物はこれだから嫌いなのです！！でもこの煙幕も時期に薄くなります。その時が貴方の最後に……）

「ちなみに俺のスモークグレネードは108式まであるぞ（笑）」

「へ？」

その後、オルコットは煙幕の周りをうろつきながらなにやら騒いでいたが、俺は無視して煙幕が薄くなってきたら2、3個放り投げ濃度を濃くしていった。

フフフ。これこそ対ビット用戦術、「相手が見えなければビットで攻撃できなくね？」だ！！

いかにビット兵器による全方位からの攻撃といえど相手が見えなければ攻撃できまい。まあ、俺も相手が見えないから攻撃できないけど。

地味？卑怯？フハハハ！！俺の目的は時間稼ぎだ！！それに勝つ
気など無いからこれでよいのだーーーー！！！！

20分後

アリーナ内外はなんと言うか白けた雰囲気が漂っていた。だが、
それでいい。俺の試合がしょぼければしょぼいほど一夏の印象が強
まり、俺に対する印象は低く薄くなっていくからな！！

「……あ。山田先生」

「ふえ、な、なんでしょう」

「スモークグレネード無くなったんで棄権します」

「え？」

その言葉と同時に試合終了のブザーになる。

「「「ええええーーーー！！！！」」」

その8

試合終了のブザーが鳴り、その事に呆然としているオルコットを尻目にアリーナのビット内に戻ってきたら

「まともに戦わんか!!」

との声と共に振り下ろされる出席簿。甲高い音と共にシールドエネルギーが減った。

俺が試合を始めて最初にシールドエネルギーを削ったのは織斑先生だった（笑）

「まともに戦ってボコボコにされて来いと？嫌ですよ俺、そんな事」

「だからと言ってもっとマシな戦い方があっただろう」

「……ハア。次回があったらそうします」

そこで織斑先生との話を切って一夏に聞く。

「一夏、専用機は来たのか？」

「え、ああ。四五六の試合が始まってすぐに来たけど……」

「そっか。なら一次移行も済んでるか。じゃあがんばれよ」

試合は20分もあつたんだ。原作みたいに戦いながらするよりも簡単に終わるだろう。

「……あ」

一夏のその呟きを聞くまでそう思ってたんだけどなあ。

「……おい」

「……ごめん、一次移行出来てないです」

「俺の試合、20分近くあったよな。内容も目を離せないような内容じゃ無かったよなあ」

「はい、そうです」

「なら、何で一夏君は一次移行してないのかな？俺にわかる様に話してくれるかな」

ガクガクブルブル。そんな擬音が聞こえてくるようなほど震えながら怯える一夏。

「……ハア。もういいや。さっさと行って来い」

「……ごめん」

「なら、カッコよく勝ってこいよ。それでキャラにしてやるよ」

「……わかった。四五六、行って来る」

「おう。行って来い」

その後の試合はほぼ原作通りに進んだ。違うとすれば、一夏が負けたのではなく僅差で勝ったというところか。一夏の残ったシールドエネルギーは4だけだったからな。

その後、クラスで一夏の代表決定記念のパーティーが行なわれたが俺は最初の乾杯だけ付き合っただけでそのあとこっそりと抜け出した。

人ごみ、と言うかああいうわいわいと騒ぐのは苦手なんだよね。騒ぐなら気の知れた数人で騒ぐ方がいいからな。

抜け出して向かったのは屋上。夕日が沈み暗い夜空だった。が気にしない。

さて、今回の試合で俺と一夏の印象は大体決まった。地味で卑怯で意気地が無い俺と、カッコよく正々堂々と意気地がある一夏。

どちらに人気が出るかなんて一目瞭然。これで今後も地味に過ごしていけば俺の事なんて気にするような人は少なくなっていくだろう。……これでいい。このまま地味に過ごしていく事が俺の平穩に繋がるんだきっと。

そう思っていたら屋上のせいか突風が吹き目にゴミが入り涙が出た。取るうとして目を擦るもなかなか取れない。

「クソッ!!」

そう悪態をついていたら

「……四五六君？」

簪さんが俺の名前を呼んだ。……ん？

「か、簪さん！？何で此处に！！」

「……四五六君のクラスの人に君が居なくなっただから知らないかって聞かれたから探してたの」

「あゝ、黙って出てきたからなあ。迷惑掛けちゃったな」

目を擦り軽く笑う。

「……」

「？。簪さん、どうしたの」

「四五六君」

「え、な……」

名前を呼ばれたと思ったなら頭を引つ張られ、簪さんの胸に抱きしめられた。

「ちょ、何して……」

「私は何も聞かない。だから泣いてもいいんだよ」

「え？」

「私は今日の試合で四五六君がどう戦ったのは知らない。でも負け

たつて事は聞いてる。織斑君が勝つたつて事も」

「……」

「でも悔しかったんだよね。織斑君は勝ったのに四五六君は勝てなかったことに……」

そう言いさらに強く抱きしめる。

「……私にも少しそういう気持ち、分かるから」

やさしく微笑み、頭を撫でまるで赤子をあやすようにする簪さん。

「だから、今だけは泣いてもいいんだよ」

簪さんの心臓の音が聞こえてくる。とても安らげる気持ちになれる。

が!!

勘違いだから!!その思い、勘違いだからね!?

裏 その2（前書き）

本音さんと簪さんの口調が分からない。

裏 その2

今日、このIS学園は異様な雰囲気にもまれていた。

何故か？それは今日イギリスの代表候補生と世界に二人だけの男性IS適合者の試合が行われるからだ。

私は多少興味が引かれたが見に行く事は無かった。なぜなら、男性の片方のせいで私の“この子”の開発が途中で止まってしまったからだ。

分かつてはいる。“この子”と片方の男性、織斑一夏の専用機の開発ではどちらが優先されるかなんて。……分かつてはいるけど、納得は出来なかった。

だから、私はクラスの皆や他のクラスの生徒が見に行っている間私は部屋で一人、パソコンの前で“この子”の調整をしていた。

調整をしていて気が付いたらお昼の時間になっていた。ふと部屋の机の上を見てみると其処には彼が作ったお弁当が置かれていた。

最近の私は彼のお弁当のせいでお昼になるとお腹が空くようになってしまった。……完全に餌付けされてる気がするのは気のせいじゃない気がする。

彼のお弁当を食べながら、ふと考える。

（そういえば、四五六君はどうやって戦ったろう？）

彼に対して専用機の開発、と言う話は聞いたことはないから必然的に彼は量産機で戦うという事である。専用機持ちかつ代表候補生相手に量産機に乗った素人が勝てるはずなんかない事なんて、考えればすぐに分かることなのに彼のクラスの先生は何を考えているのかしら。

でも、今日彼が部屋から出て行くときに今日の試合の事を聞いてみたら「まあ、何とかして見るよ」って苦笑しながら言ってたからきっと彼も勝てないことはわかってたんだと、そう思ってしまった。

でも、それは間違いだった。彼だって男の子なんだ。負けることが悔しくない、なんて事なんてあるわけが無かった。私が“あの人”に勝てなくて悔しい思いをしてるみたい……。

外が暗くなってきた頃、ノック音が聞こえてきた。こんな時間に誰？と思って開けてみると、私の幼馴染の布仏 本音が来ていた。

「どうしたの？こんな時間に」

「かんちゃん。ごろーちゃん、帰ってきてない？」

「ごろーちゃん？」

「しごろ、だからごろーちゃん」

「四五六君？まだ帰ってきてないけど、どうかしたの」

「うん。今私のクラスでおりむーの代表決定記念のパーティーしてたんだけどごろーちゃんが居ないのに気が付いて探しにきたの」

「そうなんだ。……本音のクラス代表は織斑君に決まったんだ」

「うん！！おりむーすごくカッコよかったんだよ！！」

裾を振り回しはしゃぎながら話し出す本音。

「最初は一次移行が出来てなくてやられっ放しだったけど一次移行が出来てからはこう、ビューンっていつてバーンって戦って、最後はギリギリだったけどセツシーに勝っちゃたんだよ！！」

「一次移行できていない状態で戦って戦闘中に一次移行したの……非常識」

一次移行も出来ていないのに戦闘を始めると、馬鹿なのかしら？教師も見えていないで止めれば良いのに。

「なら四五六君の試合はどうだったの？」

何気なく彼の試合の事を聞いてみたたん、気まずい雰囲気を出し始める本音。

「その、ごろーちゃんは……」

言いづらいように言う本音を見て私は悟った。

「……四五六君、負けたんだ」

「……うん」

「そっか……わかった。私も探して見るね」

「ありがと、かんちゃん。私は食堂付近を見てくるから、かんちゃんも屋上あたりから当たって見て」

「わかった」

そうして本音と別れ、彼を探しに行く事に。そうして屋上に出るドアのガラス越しに彼の後ろ姿が見え呼ばうと思えばドアを開けた瞬間彼の口から「クソッ！」という声が聞こえ、目もとをこしこしと拭いている姿が見えた。

拭きながらも彼の体は小刻みに震え、目もとを拭いている姿は泣くのを必死に堪えているようにしか見えなかった。

その姿を見たとき、私は思った。彼は悔しかったんだって。

たとえ専用機持ちの相手とは言え負けた事が悔しかったんだって。本音の様子からしてたぶんボロボロにされたんだと思う。それでいてもう一人の男性である織斑君がギリギリとはいえ勝った事が悔しかったんだ。

そんな彼の姿を見てしまった私は殆ど無意識の内に彼の前に出て、気が付いたらまるで小さな子供をあやすように彼を抱きしめていた。

彼が泣く事を必死で堪えている姿を見ると昔の私を見ているようで、それがとても悲しく思えて、私は彼が少しでも気が楽になるようにと、やさしく抱きしめた。

男性を自分の意思で抱きしめるのは恥ずかしかったけど、それよ

り彼が泣くのを堪えている姿を見るほうが辛かった。

……どうして辛い、って思ったのかな？

裏 その2（後書き）

おやゝ。四五六君は気にしていないのに周りの雰囲気は怪しくなってきたぞ。

以下、本音が最初に簪のところに尋ねてきたときに書いていた文章
外が暗くなってきた頃、ノック音が聞こえてきた。こんな時間に誰？と思って開けてみると、私の幼馴染の布仏 本音が来ていた。

「どうしたの？こんな時間に」

「かんちゃん。ごろーちゃん、帰ってきてない？」

「ごろーちゃん？」

「しごろ、だからごろーちゃん」

「四五六君？まだ帰ってきてないけど、どうかしたの」

「うん。今私のクラスでありむーの代表決定記念のパーティーしてたんだけど……」

其処まで言って俯く本音。普段の彼女と違い何処か暗い雰囲気を纏っていた。

「パーティーがどうかしたの？」

「パーティーは関係ないの。ただごろーちゃん、乾杯しただけですぐに教室から出て行っちゃって……」

其処まで話してまた俯く本音。

「本音、どうしたの。さっきから何か変だよ」

「……かんちゃん!!」

「きゃ」

急に私に抱きつき頭を埋める本音。

「ど、どうした「私、私クラスが怖い!!」え？」

「ごろーちゃんだって私のクラスの生徒なのに、皆ごろーちゃんが居なくなったのに誰も気にしないんの。皆ごろーちゃんがまるで最初から居ないみたいに振舞って、ごろーちゃんを気にしないの」

「本音……」

「私嫌だよ。ごろーちゃんだって私のクラスメイトなのに皆居ないように扱うんだ!!私、私恐くてたまらないよう」

こんな感じで何か変な方向に走り出したので消した。何がしたいん

だ俺の頭は？

その9（前書き）

前話に書いてあった没案の方が人気が高い、たど……

その9

簪さんの胸の中、温かいナリー……って違う!!

ど、どうする!?!このまま誤解されたままではばれた時ヤバイ、シスコンさんに殺されかねん。かと言って振りほどくわけにもいかない。内気な彼女がここまでしてくれているんだ。無理に振りほどいたら彼女を傷付けかねん。それは出来ないよ。男として。

ならば、取る方法はただ一つ!!

「四五六君?……寝ちゃったのかな」

気絶有るのみ!!

(こうしてメガネが無い四五六君って結構カッコいいかもノノ)

「ハッ!!」

気が付いた時俺は自室のベッドの上で寝ていた。時計を見ると朝の4時過ぎ。どうやら気絶した後ここまで運んでくれたようだ。

(は)。にしても昨日はビックリしたな。まさか彼女があんな事してくれるなんて……)

そう思いながら静かにベッドから抜け出し、部屋にあるキッチンでお弁当の準備を始める。

（原作ではそんな事出来るような人物じゃなかったような……いやいやいかなこの考えは。彼女はもう空想の人物じゃなくて実在の人物なんだから、こんな考え方は失礼だよな）

考え事に耽つていても体は勝手に動き、手際よくお弁当を二つ作っていた。

「よし、こんな所かつて何だこれ!？」

出来たのは無駄に豪勢なお弁当だった。

「……どうしよう、これ」

普段通りに朝食を済ませ、教室に向かう時簪さんは珍しくもう起きていたので、部屋から出て行くとき、「……昨日は、その、ありがとう／＼」と、とりあえず感謝の言葉を出して出て行った。

部屋のドアを閉めるとき、何か沸騰した時の音が聞こえた気がしたが気のせいだろう。

さて、教室に着きいつも通りに授業が始まりお昼になった時、即座に教室から離脱しようとしたら、「お待ちになって、一二三さん!!」と大声で呼び止められた。

振り向くと、其処には少し緊張した表情で立っているオルコットさんの姿が。

「……えっと、何か？」

「その……一二三さん、以前の失言、申し訳ありませんでした!!」

そう言い深く頭を下げるオルコットさん。

「ちょ、何を……」

「これはセシリア・オルコット一人として、そしてイギリス代表候補生として正式に一二三四五六さんに謝罪を申し上げているのです」

頭を上げ目を合わせ言い放つオルコット。

「どういう事だ？」

「セシリアは昨日のパーティーが始まってから皆の前でこの前言った事に対して謝罪したんだよ」

「織斑……」

「私は一夏さんと会ったまで、その、女尊男卑の思考に染まってしまっていて男だから、そんな事だけで相手の事を見ることもせずに見下していました。でも一夏さんとの試合で私はその考え方を改めました。このような考え方は一二三さんに指摘された通り、私だけではなく祖国の品位すら落としかねる、と」

涙ぐみながら話すオルコット。

「ですから、今更かも知れませんが誠に申し訳ありませんでした」

そして再び深く頭を下げるオルコット。

「い、いや、その、頭を上げてください、オルコットさん。オルコットさんがこうして謝罪をしてくれたなら俺は気にしてませんから」

「一二三さん……ありがとうございます」

オルコットさんは周りのクラスメイトに「よかったね」とか言われながら慰められていた。

ってかここで「その謝罪、お断る!!」等と言いでもしたら今後の生活に多大なる支障が出るからな。……それに“俺”は気にしていないよ。まあ、周りの人たち、特に政府とか面子が大事な人たちがこのことを知ったらどうなるかは知らないけどね。

「……そうだ！四五六、今日は一緒に食事しないか？」

「……え？」

「ほら、四五六っていつも昼になるとどっか行って、一緒に食事したことって無かったからさ」

「それは……」

「な、いいだろ」

何故かキラキラと目を輝かせながら言ってくる一夏。

「……ハア、分かった。一緒に食事しようか。」

「そっか！ならセシリアと篝も早く行こうぜ！-」

ごく普通にオルコットと篠ノ之を連れて行こうとする一夏。

「おい、織斑」

「なんだ？」

「オルコットさんと篠ノ之さんも一緒なのか？」

「ああそつだよ。飯は一緒の方が美味しいだろ？」

何言ってるんだ、と言わんばかりの表情で返事をする。

「……ハア」

「？」

何故俺がため息をついたのか解らないという表情を浮かべる織斑を引きつれ、食堂に着く4人。

「何食べよっかな」

「先に席、確保しておくぞ」

「おう、って四五六、食券は？」

「俺は弁当だよ」

「そうなのか……なら早く行くな」

そうして席を確保して、少ししたら3人が来た。

「待たせたな」

「待たせましたわね」

「すまない、遅くなった」

「気にするな」

そうして3人が来たので俺は鞆から弁当箱を取り出す。

「かなりでかいな、いつもそんなに食べてるのか？」

「いや、食材が痛みそうだったから使い込んだらこうなったただけだ」

「ふ〜ん。少し貰ってもいいか」

「良いぞ」

そうして蓋を開けたら

「なん、だと……」

「まあ」

「美味しそうだな」

三者三様で驚かれた。

「卵焼きで良いか？」

「おう！」

織斑にとりあえず卵焼きをあげる。

「もぐもぐ……すっげ、メツチャうめえ!!」

「そうか？」

「ああ、まじで美味かったよ」

「それは何より」

そうしてもぐもぐと食べていたらオルコットさんと篠ノ之さんがこちらを見ていたのでしょうがないから、から揚げと、ミニハンバーグをお裾分けした。

「えっと、よろしいので？」

「いいよ。と言うか食べ切れそうにないからどうぞ」

「すまん、ではいただく」

二人とも俺のおかずを食べた数秒後、撃沈した。

「ど、どうした。不味かったか」

「……いえ、とても美味しかったです」

「……ああ。おいしかった」

「なら、いいんだが……」

（（男性なのにここまでおいしい料理が出来るなんて……））

なにやら二人ともへこんでいた。

さて、いろいろあったがこれにて一件落着として、明日から地味な生活に戻れると思っていたら「生徒会から呼び出しします。一年一組、一二三四五六君。一二三四五六君は至急生徒会室に来てください。繰り返しします。一年一組」と呼び出された。

ごめん。簪さん。もう君にお弁当は作れないかも……

その9（後書き）

セリフで一人多いのは篠ノ之空気さ、
うわ何をする、やめ（r
z

その10（前書き）

楯無さんの口調と性格が把握できない。

そのせいどころなつた。

その10

今俺の目の前にこやかに笑っている女性、名前を更識 楯無という。

彼女は簪さんの姉であり、日本お抱えの暗部「更識家」の現当主である。性格は明瞭快活で文武両道、掃除に家事、料理に裁縫、更にはIS関係の知識も豊富で専用機を作り上げたことも。

プロポーションも女性として魅力的な体を持ち、まさに完璧超人といっても過言ではない、と言う原作でハイスペックを地でいく人だ。

ただし、シスコン。

そんな人が俺を呼び出した理由なんて、一つしかない。

「こうして実際に会うのははじめてかしら。簪ちゃんの姉の更識楯無よ」

「えっと、はじめまして。簪さんのルームメイトをしている一二三四五六です」

「私の名前も珍しい、と思ってたけど貴方のはもっと珍しいわね」

「よく言われます」

「ここまでにはこやかに話が進んでいるが、この後からが問題な気がする。」

「……さて、今日ここに呼び出された理由、わかるかしら？」

「……先日の試合、の事ですか」

「そうね、それも有ったわね」

「それも？」

「では先にそのことから放し始めましょうか」

「はあ……」

其処から、試合内容についてクドクド言われたが、まあ楯無さんも素人が真正面から代表候補生に戦いを挑む無謀が分かっているように大した事は言われなかった。ただ他の方法が無かったのか、と言われたぐらいだった。

「……このぐらいかしらね、生徒会長として貴方にいう事は」

「そうですか……生徒会長として？」

「そう、ここまでは生徒会長としてのお話。これから話すのは更識簪の姉として話すことよ」

其処から急に顔つきが真剣になり、場の雰囲気もかなり変わった。

「この話をする前に、この学園の警備の話をしなくてはならないの」

「?」

「この学園は世界中からIS関係の生徒や技術者が集まってくるの。そのため警備関係もかなり厳重になってるのは分かるわね」

「え、ええ」

徐に立ち上がり俺の周りを回りながら話始める。

「警備の関係上、監視カメラもこの学園中に設置してあるわ。無論
プライベートな場所、トイレとか浴場は別だけど」

「はあ……」

「そして、監視カメラがある場所に“屋上”も含まれてるの」

「……」

この時点で俺は冷や汗が止まらなかった。

「そして昨日、たまたま私が屋上の監視カメラの映像を覗いた時……」

バキィ、そんな音を上げて彼女の手の中の扇子が砕けた。

「……ねえ、四五六君。どうして貴方、簪ちゃんに抱きしめられてるのかな」

俺の正面に立ち、俺の顔を両手で掴み顔を固定して至近距離で話す楯無さん。その目は暗く濁っており輝きも無く、一言で言うならヤンデレの目つきだった。

「あ、あれは……」

「あれは、何かな？私に分かるようにシッカリとオシエテクレルヨネ？」

この時点で俺は気を失いそうになっていた。何だこれ、何でこんな目にあってるんだ。楯無さんの手がめり込んで痛い。と言うか血が出てきてるんですけどおおー

「あれは、簪さんが俺を慰めてくれただけです」

「慰めた？」

「そ、そうです。その日の試合で俺が勝てなかったことに、その、泣きそうになった所を簪さんが抱きしめてくれただけで、他意はありませんー！」

実際は目にゴミが入って涙が出ただけのを簪さんが勘違いしただけだけど、こう言っておかないとまずい気がする。

「ホントウかな？」

「ほ、本当ですー！」

「……」

「……」

そのまましばらくの間見つめあう。ここで少しでも目を逸らしてもしたらきつとヤバイ。明日の日の出を見られなくなる気がする。

「……フウ、どうやら本当のようね」

そういつて両手を離し手くれた楯無さん。

「痛っ」

手を離してくれたのはいいのだが、手の爪がめり込んだところから軽く血が出てた。

「あ、ご、ごめんなさい。今手当てするわね」

手際よく傷跡を手当てしてくれる楯無さん。

「本当にごめんなさいね、四五六君。私、簪ちゃんの事になるとどうしても制御できなくて……」

シユンとして俯く楯無さん。

「いえ、大丈夫ですよ。そんなに深い傷でもないですから。」

「そうだけど……」

先ほどのヤンデレのような雰囲気は無く、今の彼女は悪い事をし
て怒られるのではないかと不安になってる子供のようなだった。

「フフ」

「な、なに。急に笑って」

「いえ、さっきの楯無さんと今の楯無さんのギャップが可笑しくて」

「な！？も、もう。お姉さんをからかわないの！！」

「ハハハ」

「わ、笑うなー！！」

ポコポコと軽く叩いてくる楯無さん。あれ、彼女ってこんなに可愛い人物だったけ？

「フウ、フウ……コホン。話は変わるんだけど四五六君から見た簪ちゃんってどんな子かな」

「？どういう事ですか」

「その、ね。私は簪ちゃんの事がとっても大事でとっても心配なんだけど、その、いろいろあってね。直接話す機会がなかなか無くてね」

何処か諦めたような顔つきで話す楯無さん。

「……簪さんは普段はあまり話すことはありませんけど、優しくていい子だと思いますよ」

「そう？」

「じゃなきゃ、俺みたいなのを慰めてくれませんよ」

「そうかしら？」

「そうですよ」

その後は簪さんの最近の状況を軽く話して、お開きになった。

「ごめんなさいね、こんなに引き止めちゃて。それに怪我也させちゃって」

「いえいえ。それだけ簪さんのことが心配なんだって分かりましたから」

「そう言ってくれると助かるわ」

その時の彼女の顔は妹を心配する姉、そう完璧超人などではなくただの普通の女性だった。

「簪さんとの仲、よくなると良いですね」

「ええ、そうね」

「では、失礼します」

「今日は、ごめんなさいね」

「いえ、もう気にしてませんから」

そうして、生徒会室から出て行く俺。

フウ。……生きた心地がしなかった。だってあの人ヤンデレぽっくなつてた時後ろに何か専用機っぽい物がゆらゆらと見えてたもん。

下手な回答したらきつと消されてたかも。

でも、まあこれで取り合えず危機は去ったかな。簪さんにちよっかい出さなければ何もしてこないだろうし。俺簪さんにちよっかいなんてして……して……。

俺、餌付けしてた。どうしよづ。

その10（後書き）

妹LOVEな楯無さん。

その思いは彼女から目の輝きを奪うほどである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8610y/>

IS 転生して貰ったのは！？

2011年11月27日22時40分発行